

薄々、危機感を持ち始めていた。

沖縄の祖父母の家に越してきてから三ヶ月ほど経つ。転校したての頃は進学進級で賑わっていた高校も、今はすっかり落ち着いている。もう島蟬がうるさい季節だ。

それなのに。

（私、クラスに馴染めてないかも……）

クラスメイトたちは話しかけてくれるのだが、香奈には方言がさっぱり分からない。会話の中に方言が出てくると、つい緊張してしまう。そんな態度をみんな

はどう受け取ったのか、いつしか香奈とクラスメイトの間には、なんとなく隔たりができていた。どう考えても、クラスに馴染めないのは香奈に非がある。

溜息をつきながら鞆に教科書を移した。

まったく友達がいないわけではない。ただ、前の学校と比較すると、今のクラスは香奈にとって良いクラスとは呼べない。

東京にいたときは、本当に楽しかった。クラスのみんなが仲良しで、香奈が転校する時は、何人も泣いてくれた。中二の時から念願だった高校に入学し、その

一年は今までにないほど充実していた。この学校に入って良かったと、心底思える場所だった。

しかし、高二になる少し前、香奈の両親の海外赴任が決まったと突然聞かされた。沖縄のおばあちゃんの家に行つて欲しいの、と。

弟はさほど気にしていない様子だったが、香奈はショックだった。せっかく頑張つて入った高校なのに、見ず知らずの土地の高校に編入するなんて考えられない、絶対に嫌だと必死に抗議した。香奈がどう言おうと、決まった事は変えられない。そう分かっている、

我儘を言わずにはいられなかった。生まれて初めて両親と喧嘩をした。特に父とは、ほとんど口をきかなかった。

思い出すと、今でも腹立たしくなってしまう。

「汐田香奈さん」

不意に名前を呼ばれ、振り返った。見ると、すらりと背が高く漆塗りのように艶やかな長髪の、女子生徒が立っていた。

彼女とは今まで一度も話したことがない。いつも一人でいて、休み時間は自分の席でなぜか新聞を広げている。友達がいけない訳ではなく、一人が好きなのかもしれない。寡黙で飄々とした感じだ。

「自分、玉城紗和子です。以後よろしく」

眉一つ動かさず、やや低めの声でそう言った。

「う、うん、分かるよ。よろしく」

沖縄では女子の一人称がおかしい。「私」や他の言い方もあるのだが、よく見る学生は自分のことを「自分」と言うのだ。紗和子がそう言うのと沖縄なまりも相まって、時代劇に出てくる女用心棒のようで格好いい。「汐田さん、まだ部活入ってないって聞いたけど、ほんと？」

香奈はコクリとうなずいた。

「じゃあ、ボランテИА部んかい、入らねー？」

無表情で聞いてくる。

「私で大丈夫？ ボランテИАっていろんなことするのに、方言が分からないと困るんじゃない……」

「そんなこと、気にしねーで平気だよ。自分が教えるからさ」

乱暴な言い方に聞こえるが、これも方言のうちだと香奈の祖母は言っていた。

「本当？」

方言が分かれば便利になる。香奈にとっては大きな魅力だった。沖繩の方言や習慣を、もっと知りたい、五月に校外学習に行ったときから、そう思い始めていた。

「そしたら入る？」

「入る！」

夏休みに入る数日前、やっと部活に加入した。

沖繩は暑いから、と髪を短くしたのがいけなかった。肩の辺りではつさり切り揃えた髪は、結べなくなつて余計に暑い。

夏休みを迎えるに当たり、終業式を終えた。午前で学校が終わりなので、香奈たちは帰路についていた。バス停までの坂道からは、さとうきび畑が見える。背の高い緑の草が揺れるのを眺めていると、暑さで陽炎が立ったのではないかと錯覚してしまう。

「紗和ちゃん、夏休みも部活あるんだよね」

「うん」

紗和子が手をひさしにして、顔に照りつける日光を遮った。

「紗和子！ 待って」

突然背後から大声が聞こえ、香奈たちは振り返った。息を切らしながら走ってくる長身の男子には見覚えがある。

「なに」

「顧問から聞いたんよ。新しく部員が増えたなら言いなっさー。誰が入ってくれたん？」

彼は、同じクラスの安仁屋龍雪だ。あにやたつゆき紗和子と同じく

ボランティア部に所属している。

校外学習で同じ班になり、少しだけ喋るようになった。

「ああ、ごめん忘れてた。香奈だよ」

紗和子はいくまで無表情なのに対し、龍雪は目を大きくした。

「香奈ちゃんが？」

一瞬、香奈の入部を嫌がられたのかと思った。しかし龍雪は、ぱっと笑顔になった。

「やった、これで安泰だ」

「え？」

存続が危ぶまれるほどの部活なのだろうか。

「うん、部員が最低でも三人必要なさー。香奈が入ってくれなかったら、安仁屋と自分だけだったんだよねー」

紗和子のがんびりと言う。なんだか沖縄の時間は、東京よりもゆったりとしている。

バスが来るのも、きっちり時間通りではない。少々待たされたが、三人はバスに乗ることができた。

「香奈ちゃんちって、学校から遠いの？」

「ええと、バスで二十分くらい」

「じゃあ、俺と家が近いかもね」

龍雪がドア付近の席に腰を下ろしたので、香奈たちも隣に座った。車内はことごとく空いている。

「安仁屋の家は、商店街の中にある楽器屋さんなんだよ」

紗和子が口にした小さめの商店街は、確かに香奈の家のすぐ近くにある。

「もしかして、流れ星」

何度か通りかかったことがある「流れ星」という小



さな店を思い出した。

「へえ、知ってるんだ。なんか嬉しいな」

そう言って、龍雪は笑んだ。彼には、あまり沖縄なまりがない。香奈と話すときは、気を付けてくれているのだ。

（沖縄の人たちって、優しいんだなあ）

紗和子も、香奈に話しかけてくれて部活にも誘ってくれた。

東京と沖縄、どちらがいいかと聞かれればまだ東京かもしれないが、沖縄のゆったり感や人々の温かさには惹かれていた。

八月に入った。進まない宿題に頭を悩ませながら、香奈は時計を眺めていた。

今日は一時半から紗和子たちと、「流れ星」の前で待ち合わせをしている。ボランティア活動として、近くの海岸のゴミ拾いをするためだ。

「お姉ちゃん、手紙きたー」

階段の下で、弟が声を張り上げているのが聞こえた。

香奈は、まさかと思いながら階段を駆け下りる。

「やっぱり」

手紙の差出人は、香奈の母になっていた。沖縄に来てから初の手紙だ。転校する前に、父と、汐田家で最大と思しき親子喧嘩をして母を困らせてしまったので、香奈からは手紙を出せずにいたのだ。

緊張しながら便箋の端を破ると、紛れもない母の字が目に見え込んできた。

学校には慣れたか、友達はできたか、きちんと勉強しているかなど、ありふれた文章だ。三枚の紙のうち、

一枚は香奈へ、二枚目は弟へ宛てたものらしい。

弟に二枚目を渡すと、嬉しそうにどこかへ行ってしまった。

（三枚目は？）

紙をめくると、その中央に『お父さんが、香奈と仲直りしたいって』とだけ書かれていた。

（嘘だ）

香奈の父はいつも仕事が忙しく、子供をかまうような親ではなかった。香奈の記憶の中で、父がにっこり微笑む様子はない。寡黙で厳格な人だった。

沖縄に転校が決まった時、父は、決まった事だからしょうがない、と初めのうちは香奈をなだめていたが、それでも納得がいかに口答えしたら怒鳴られてしまった。香奈にとって大事な友達と学校を、そんなどこでも同じだ、友達なんていくらでも作れる、と言われたのが未だに許せない。

今でこそ、紗和子や龍雪のような友達ができた。でも、東京の友人たちを忘れたわけではない。香奈にとっては、みんなが同じくらいに大切なのだ。

（お父さんあんなに怒って、私の意見なんか完全無視だったじゃん。お母さんが仲直りさせたいだけでしょ）  
香奈は溜息をついて、自分の机の引き出しに便箋をしまった。返事を書くのか考えていると、待ち合わせの時間が近くなっていることに気付き、慌てて家を飛び出した。

青く高い空に、絵に描いたような入道雲が浮かぶ。道脇では、目に鮮やかなハイビスカスや、対になったシーサーの置物がこちらを向いている。

（いかにも沖縄、って感じだな）

赤瓦屋根の民家が連なる道を歩いていると、何度も、声が飛行機の轟音にかき消された。

「え、なに？」

龍雪が香奈の声を聞き取ろうと、こちらに耳を寄せてきた。

「私、沖縄の海を間近で見るのは初めてなの！」

さっきよりも大声で言ったとき、やっと巨大な飛行機は三人の頭上を通過した。

「海、今が一番きれいかもね」

紗和子が飛行機を目で追ったので、香奈もそちらに視線を移した。

はっと息を呑む。

真っ白な砂浜と、エメラルドグリーンに水色を混ぜたような色の、穏やかな海が広がっていた。日の光を反射して、きらきらと光っている。目が離せなくなるほどの絶景だ。香奈の胸は高鳴る。思っていたよりずっと、美ら海<sup>うみ</sup>だった。

夏休みだけあって、観光客の姿も見える。

「ここは、まだいい方だよ。観光名所の海なんか、人だらけになるもん」

香奈たちのいるK町は、沖縄本島の中でも田舎のほうなので、ゴミ拾いに支障をきたすほど人でごった返しているわけではない。

三人は、砂浜に降り立った。足元から熱気が立ち上ってくる。

海は青で砂浜は真っ白。じつとりと身にまとわり付く暑さを忘れさせるほどに、美しい。

しかし紗和子たちは、この景色を堪能することもなく、さっさと海の家にはトングを借りに行ってしまった。

地元の海なので、見慣れているのかもしれない。

手分けしてゴミを拾うことになったので、香奈は波打ち際へ向かった。波に打たれながら、小さなヤドカリが歩いている。体の割には大きな貝を背負って、疲れないのだろうか。

注意して見てみると、岸から遠い海には小魚の群れも見える。手で海水をすくうと透き通った水なのに、遠くから見ると青いのはなぜだろう。ここには、香奈の好奇心をくすぐるものが山ほどある。

しばらくゴミを拾いながら歩いていると、急にサンダル越しに地面の感覚が変わった。砂よりもずっと硬い、これは。

（珊瑚だ！）

辺り一面、白く細かい珊瑚の欠片だった。さすが、日本の珊瑚の約九十パーセントが沖縄に生息しているだけのことはある。

波打ち際でひしめき合う珊瑚の山は、すべて死骸なのだろうか。そうとは思えないほど、滑らかで可愛い。

（東京にいたら、こんなの見られないな）

沖縄のいいところを見つけたたびに、父の顔が頭に浮かぶ。『沖縄は、お前たちの母さんの故郷なんだぞ。おばあちゃんもおじいちゃんも住んでる。いい所だ。東京よりも楽しいかもしれないよ』父は、香奈と弟にそう言った。

今の香奈には、その言葉が受け入れられる。だからこそ、父への微妙な罪悪感が、拭えない。

香奈が東京にいた時は、そうではなかった。もちろん頭の片隅では、沖縄が良い所なのは分かっていたが、香奈が父に抗議したかったのはそういう事ではなかつ



ダル越しに地面の感覚が変わった。砂よりもずっと硬い、これは。

（珊瑚だ！）

辺り一面、白く細かい珊瑚の欠片だった。さすが、日本の珊瑚の約九十パーセントが沖繩に生息しているだけのことはある。

波打ち際でひしめき合う珊瑚の山は、すべて死骸なのだろうか。そうとは思えないほど、滑らかで可愛い。しい。

（東京にいたら、こんなの見られないな）

今足元に転がっている、タバコの吸い殻も空き缶も、観光客が捨てたものだろう。この島の人々を『自分たちとは関係のない赤の他人』としか認識していないから、こんなことができるのだ。少し前まで、ポイ捨てはしないまでも、香奈もそのうちの一人だった。

「香奈、拾えた？」

紗和子が、大きくなったゴミ袋を持って歩いてきた。

「ちよっとだけ。紗和ちゃん、すごいね。何が入ってるの？」

彼女の袋は、香奈の袋の倍くらいある。

「釣り糸」

袋の口を開けて中を見ると、海草のくずが絡まった、もじゃもじゃした塊が入っていた。それにしても、すごい量だ。

「海の家の人だね、海底に沈んだのを取ってきてくれたんだ。珊瑚礁にとって、釣り糸は有害だから」

ただ海岸を綺麗に保つためにゴミを拾うのではないのだと、香奈は今気が付いた。

「オニヒトデとか赤土のせいもあるけど、観光客のポイ捨てしたゴミが、うちなーの海を 悪いほうへ変え

てるさあね。珊瑚は死んでいくし、魚も減っていく。  
ないちゃーも、もって考えて欲しいよね」

淡々と聞こえる紗和子の声の中に、わずかな苛立ちを感じる。感情を露骨に出すことがない彼女にしては珍しく、香奈はそれだけでも沖縄の環境問題の深刻さを思い知らされた。

「ないちゃーって？」

香奈が見上げると紗和子は、しまったというように目をそらした。

「知らなくても生きていける」

「えー、方言教えてくれるって言ったじゃん」

紗和子の頬をぷにぷにと突くと、彼女は溜息をついた。

「ないちゃーは、他県の人っていう意味さあ」

香奈は、紗和子がなぜその意味を口にするのを嫌がったのか、図りかねた。しかし紗和子が「他県の人」が沖縄に来るときはもっと気をつけて欲しい」と言ったのは分かった。

「私、なんだか申し訳ないような気がする」

「二人とも、どんな感じ？」

香奈が言いかけたとき、龍雪がこちらに歩いてきた。

「あれ、香奈ちゃん、あんまりゴミなかったの？ 俺なんかすごかったよー」

そう言って彼は、よく日に焼けた額の汗を拭いた。

「私は、タバコの吸い殻とか、細かいものばかりで」  
「そっか。俺んところは、空き缶とかペットボトルが多かったよ」

ほら、と言うように片手に持った袋をひょいと上げる。

「まったく、ないちゃーは」

言ってから龍雪は、はっとしたように口をつぐんだ。  
香奈も今度は分かった。

紗和子がないちゃーの意味を言いたがらなかったのも、龍雪が口をつぐんだのも、香奈に気を使っているからだ。「よそ者」のような言い方を避けてくれたのだ。

「ごめん」

「いいんだよ。私が東京出身なのは事実だし」

香奈は、八の字眉毛を寄せる龍雪に笑んだ。

「私もね、嫌だなんて思うんだ。海岸にゴミを捨てたり、釣り糸をそのままにしたり。自分たちは遊びに来て帰っていくだけだから気にしないけど、現地に住んでる人たちはそうじゃないんだよね……。私もそんなないちゃーのうちの一人だったと思うと、恥ずかしい。汚れていく海のこと考えない、島の人のことも考えないなんて嫌だな。私、沖縄の自然を壊したくない。沖縄が大好きになっちゃったの。私がこんなこと言っても、説得力ないかもしれないけど」

紗和子がふっと微笑んで、香奈の頭をなでた。彼女の笑った顔があまりに綺麗で、香奈は思わず見とれてしまう。

「香奈はもう、しまんちゅさー」

「島……?」

「島人って書いて、しまんちゅ」

八月の半ば。夜から公園で、花火大会が開かれる。龍雪が三人で行こうと誘ってくれたので、香奈は「流れ星」に向かった。

商店街の一角にある小さな楽器屋の前には、すでに

人影があった。

「よっ」

軽く手を上げて白い歯を見せるのは、龍雪だ。夏祭りの会場までの行き方が分からないと言ったら、彼が案内してくれることになった。紗和子の家の近くに会場があるので、彼女とは現地で待ち合わせだ。

「楽しみだなあ」

墨を流したような空に、たくさん星が見える。

「花火もいいけどさ、流れ星とか無いかね」

二人して空を見上げながら、のんびり歩いた。

「安仁屋くんて、流れ星が好きなの？ お店の名前も」

「好きだけど、名前はさ、おじいが決めたんだ。俺のじいちゃんの名前がね、龍生って書いて、たつおって読むんだけど」

少し考えさせる間を作るところが、龍雪らしい。

「ああ、わかった！ たつお、龍生、りゅうせい、流星で、流れ星、みたいな」

「当たり前」

龍雪の家系は、みんな名前に龍が付くそうだ。

「俺が生まれた時、真冬だったんだけどさ。父さんは病院の窓から、確かに雪を見たんだって。沖縄で雪だよ。なんか笑っちゃうよな。それで名前が龍雪なんだってさ」

名前の由来は、人それぞれで面白い。沖縄で雪を見たというのは、なかなか感動的だ。

「香奈ちゃんの名前の由来は？」

「うーん、それがよく覚えてないの。父がつけた名前なんだけど。沖縄生まれの母が、何か父に沖縄にまつわる話をしたら、父がその話を聞いて、娘が生まれたら絶対に香奈って名前をつける、って決めたんだって。



何でだったかなあ」

龍雪を仰ぎ見ると、なぜか目をそらされてしまった。

「俺、分かったかも」

そっぽを向かれて、彼の表情が見えない。訝しく思ったが、由来が分かったなら是非聞いておきたい。

「何なの？」

「いやっ、やっぱり違うかも！ 紗和子に聞いてみたら」

焦ったような声が聞こえ、香奈はますます不思議になった。

「そんなに変なことなの？」

「変？ まさか！」

龍雪が言った刹那、前方に花火が上がった。音も後から付いてくる。

「わ、もう始まっちゃってるよ。紗和ちゃん待ってるかも」

急ぎ足になった香奈の手を、龍雪が掴んだ。

「まだ、紗和子来てないと思うよ。沖縄の人は結構時間にルーズだから」

公園の入り口のガジュマルの木は、大きく枝をくねらせながら四方に伸びている。待ち合わせ場所には最適だ。

「紗和子」

龍雪が呼ぶと、彼女らしき影はゆるりと振り返った。

「紗和ちゃん、ごめんね。待った？」

「いや、今来た」

頭上では色とりどりの花火が打ちあがり、盛大な音を立てている。龍雪たちは、近くにあった三人がけの

ベンチに腰を下ろした。

「綺麗だねー、花火」

隣に座る香奈の横顔を視界にとらえながら、龍雪は頷いた。

最近、こんなふうに香奈が近くにいると、落ち着かなくなる。

五月に校外学習で飯盒炊爨をしたとき、バスに乗ってから香奈はずっとはしゃいでいた。沖縄独特の建築物やら植物やら、目に入った物を何でも珍しがって目を輝かせた。川原に着いたとき、職員が「めんそーれ<sup>いらっしゃい</sup>」と言ったのが可愛い、と笑顔を見せた。今まで見たことのない、満面の笑みだった。とにかく香奈は、島の何もかもが好きなのだ。カレーを食べる時に彼女が「いただきます」と両手を合わせたので、龍雪が「うさがみそ<sup>めしあが</sup>れ<sup>れ</sup>」と言ってやると、またえくぼを深くした。

（香奈ちゃんは、ないちゃーだ）

何度も、自分に言い聞かせた。なのに、彼女の顔を見るとそんなことは忘れてしまう。

島のものに興味を示して、ぱっと瞳を輝かせる彼女は、龍雪にとって紛れもない島人なのだ。香奈は東京から来たのだから、ないちゃーには変わりない。頭では分かっているけど、龍雪は香奈の笑顔から、目が離せなくなっていた。

少し手を伸ばせば届く距離に、香奈がいる。

「安仁屋くん？」

訝しげな香奈の目が、龍雪を見上げた。

「な、なに」

「さっきからずっとこっち見てるから、何かあるのかなって」

「えっ、ごめん！ なんでもない」  
あわてて空に目を移した。金色の、枝垂れ柳のよう  
な花火が消える。

その後を追うように、また大きな花火が上がった。  
「私ちよっと、自動販売機に行ってくるね」

それが消えたのを見届けて、香奈は席を立った。

花火の音が、後から響く。

「……安仁屋」

一人分のスペースが開いたので、紗和子の顔が見え  
た。

「ん？」

「香奈のこと、好きなの？」

心臓が強く脈打った。なんで、そんなこと。

淡々と耳に流れ込んできた言葉から、紗和子の感情  
は読み取れない。彼女にとっては何も感じない素朴な  
疑問なのだろう。

龍雪は、深く、深く息を吸った。不思議と、紗和子  
の前では嘘をつく気になれなかった。

「だったら、なに？」

紗和子は、眉一つ動かさない。彼女の反応に、龍雪  
の焦燥感が増した。

「なんだよ」

「いや、良かったなって思っただけ。安仁屋、ない  
ちゃーのこと毛嫌いしてたからさー」

その通りだ。龍雪は香奈に会うまで、ないちゃーが  
嫌いだった。今だって嫌いかもしれない。分からない。  
もう、自分の気持ちが変わらなくなっていた。この状  
況に一番戸惑っているのは、龍雪自身なのだ。

「絶対、本人に言うなよな」

「わかってる。でも、本当良かった」

花火も終わりに近づいたところ、急に周囲の観客が騒がしくなった。

みんな携帯電話の画面を見て、眉根を寄せている。香奈も真似をして、携帯を取り出した。ニュースの速報欄を見て思わず声を漏らす。

「なんだって？」

龍雪が画面を覗き込んで、声を失った。

「米軍基地のヘリが隣町の山中に、墜落。火も上がっている」

香奈が読み上げると、紗和子は唇を囁んだ。

「墜落した飛行機は、この町の基地のか」

K町の八十三パーセントは米軍基地でできている。沖縄の中で最も大規模な基地だ。

「また」

龍雪がつぶやくのが聞こえた。まるで熱に浮かされたかのように、その声はかすれていた。

（当たり前だ……悔しいに決まってる。私はテレビでしか見たことがなかった墜落事故だって、沖縄県民は何度も間近で体験しているんだもの）

それまでどこか人事だった事故が、たった今、隣町で起こった。こんなに身近な場所です。目を伏せて、はっとした。龍雪のきつく握り締めたこぶしが、震えている。

こんな時、香奈はどうしたら良いのだろう。龍雪や紗和子に、なんと言ったら良いのだろう。

（わかんないよ……私が、ないちゃーだからなの？）

紗和子たちは、香奈のことを気遣って優しくしてくれた。沖縄のすばらしいところを、たくさん見せてく



れた。なのに、香奈は二人に何もしてあげられない。何も、できない。

(どうしたら……)

龍雪の顔を仰ぎ見て、香奈はどきりとした。彼は今にも泣き出してしまうのではないかと思うほど、齒を食いしばっている。初めて見る顔だった。

(どうしたら、いいの)

鼓動が速まる。焦りが募っていき、思わず右隣の龍雪の手を握った。

彼は、はじかれたように香奈を見る。

「ごめんね。私にも、できなくて」

ややあつて、その大きな手がゆっくり握り返してくるのを感じた。冷たい手だった。

「さんきゅーな」

一瞬、沖縄の方言かと思った。彼の言葉で、香奈の心はようやく落ち着きを取り戻す。

「安仁屋、平気なの？」

「なにが」

香奈を挟んで紗和子が龍雪に声をかけたので、香奈は右手をそつと放した。

「お兄さんのこと、もう」

「平気だよ。大丈夫」

紗和子の声を遮るようにして、龍雪は笑顔を見せた。笑った顔が、なんとなく切ない。

「安仁屋くん、お兄さんがいるの？」

香奈の問いに、龍雪は笑みを崩さず頷いた。

お盆。<sup>しまんちゆう</sup>島人にとって、重要かつ多忙な三日間が始まる。方言では、シチグワチと言うらしい。沖縄には、

沖縄のお盆がある。東京とはかなり違っていた。正月には帰らなくても、お盆には帰ってこいと言われるほどの大切な日だ。

今日はその一日目、「お迎え」の日。

香奈の家でも例に漏れず、朝から忙しい。祖母と食事の準備をし、仏壇を掃除し、すっかり沖縄の習慣の中に溶け込んでいた。お盆の間は、仏壇に花や提灯を飾ったり、三度の食事を供えたりするのが一般的だ。

夕方になると、祖父母と香奈と弟は玄関に集まった。祖父が蠟燭に火を灯し、十五本の線香をつける。それから、四人で外に向かって手を合わせる。

「うんけーさびら。めんそーれー」  
お迎えいたします。ようこそいらっしゃいました。

祖父が先祖への挨拶を述べ、沖縄独特の、黒く平たい線香を外から仏壇の香炉に移した。これで、先祖を迎え入れたことになる。

沖縄はおそらく日本一先祖を大切にする地域だ、と紗和子言っていたのを思い出す。シチゲワチは、「ぬちぬぐすーじ」だとも言っていた。沖縄ならではの習慣には戸惑うことも多いが、香奈は古代から受け継がれるこのお盆が好きだ。

お盆の二日目は「中日」ナカヌヒと呼ばれている。この日は親戚の家を回り、手でお中元を渡す。

香奈も祖父と弟と一緒に、親戚の家を訪ねた。香奈は顔も覚えていないが、叔父や伯母はこちらのことを覚えていて、「あいえなー、あんしかわいいやさー」と頭をなでてくれた。中日は、お中元を渡すという目的があるが、年に一度の顔見せも兼ねているらしい。

親戚の家で仏壇に線香を立てた後、そうめんやお菓

子を沢山食べた。お腹が満たされても、まだ「食べなさいかめー」と色々な食べ物が出てくる。その上、帰るときには紙袋いっぱいのお土産を持たされるので、香奈は絶句してしまった。

シチグワチは、うちなーんちゅ沖縄人の思いやりの心が特に際立つ日だ。とにかく人に物をあげたがる沖縄の人たちが、可愛らしく思える。

底抜けに明るく、先祖や子孫を何より大切にすることの人たちが、もし東京にやってきたら、今の香奈と同じように絶句するのだろうか。

また、父の顔を思い出した。

外が暗くなってきた。帰宅途中に「流れ星」の前を通ると、三線の音と沖縄民謡が聴こえてきた。

（安仁屋くんの声だ）

香奈は思わず足を止める。祖父と弟には先に帰ってもらい、その場で立ち止まってその声を聴いていた。

（すごい、プロみたい……）

香奈が知る中で、ずば抜けて歌が上手い。三線も、自分で弾いているのだろうか。このまま沖縄の紹介番組で使えそうだ。

「香奈？」

突然名前を呼ばれ、驚いて振り返ると、紗和子が立っていた。

「久しぶりだねー、紗和ちゃんも親戚のお家に行くの？」

「今行ってきたところさー。香奈も？」

会うのは一週間ぶりだが、長いこと顔を見ていなかったような気がする。

「安仁屋んち、窓が開いているのかねー」

「歌、上手いねえ」

二人して歌に聴き入っていると、急にその音が途切れた。カーテンの揺れる二階の窓から、龍雪が驚いたような顔を見せる。

「え、なんでいるの？」

香奈と紗和子は、顔を見合わせて笑った。

「ずっと、歌を聴いてたの」

香奈が言うのと龍雪は、はにかんだように笑いながら手招きをした。

「入ってきなよ。今叔父さんたちが来てて、うるさいけど」

二人で店の中に入ると、龍雪が家へ通してくれた。リビングには男性が二人いて、香奈たちを自分の姪のように歓迎してくれた。

「二人とも、ちゅらかーぎん。どっちが龍雪の彼女ねー？」

からかわれる龍雪がおかしくて、笑っていると彼に怒られてしまった。

「あきさみよー、うち、なにも無いのにねー」

龍雪の母があれこれとお菓子を出そうとするので、丁重に断ってから隣の畳の部屋に移動した。

「お線香、いい？」

紗和子が仏壇に線香を立てたので、香奈もそれに倣った。

置かれた遺影を見て、はっと息を呑む。写真に写っていたのは、恐ろしいほど龍雪にそっくりの青年だった。日に焼けた顔に浮かぶ満面の笑みが、なぜか香奈を不安にさせる。

「兄貴なんだ。俺が中三の時にへりの墜落事故で、死



んだ」

龍雪の声が、どこか遠く聞こえる。それを言葉として認識した瞬間、息が詰まった。

（お兄さんがいるって、言ってたの……こういうことだったの）

花火大会の時、龍雪は兄のことを思い出していたのだろう。香奈はそんなことも知らずに、彼の手に触れた。

「ごめん、変なこと言ったね」

優しい声が、香奈の耳に届く。

「私、知らなくて。ごめんなさい、無神経なこと」

「俺さ、ないちゃーが大嫌いだったんだ。汚れていく島のことも考えないし、米軍の基地を、沖縄ばかりに押し付ける。ないちゃーが沖縄の苦しみを分かってくれないから、死ななくていい人が死んだりするんだって、ずっと思ってた」

紗和子があわてたように龍雪を止める。しかし彼は続けた。

「でも、香奈ちゃんが来てから考え方が変わったんだ。東京の人だって、同じ人間だ、米軍基地とか環境とか、自分の事みたいに真剣に考えてくれる人もいる、ってね」

そう言って、彼は微笑んだ。

「ないちゃーが嫌いだった。でも、今は嫌いじゃない。香奈ちゃんの、おかげなんだよ」

香奈はもう一度、遺影に目を移した。笑った顔が龍雪とそっくりだ。彼は事故で兄を亡くしたのに、なぜそんなふうに明るくいられるのだろう。彼がないちゃーを嫌っていた事実よりも、そちらのほうが驚きだった。

「すみませーん！ お姉ちゃんいますかーっ」

沈黙を破ったのは、香奈の弟の声だ。店のドア越しに叫んでいるのだろう。

「なに、どうしたの」

香奈は恥ずかしくなりながら、表に出た。

「お姉ちゃん、なんで手紙の返事書かなかったのっ」

「え、なんでって」

狼狽する香奈に、弟は便箋を突き出した。

促されて中を開く。これは母からの二通目の手紙らしい。

(……え)

お父さんに、癌が見つかったの。

心臓が強く脈打つ。後の文字が目に入らない。かろうじて知ることができたのは、赴任してからすぐに発見された癌なので、手術をすれば直る見込みがあること、近々その手術が行われることだけだ。

(だから、仲直りしたいって言ったの……?)

便箋からひらりと何かが落ちた。一枚の写真だ。病室のベッドで、不機嫌そうな顔の父と苦笑する母が写っている。父の頬はやつれ、色も白い。

自分の父が、遙か遠い地で癌に蝕まれているという事実が、リアルに胸に迫ってきた。

不意に写真がゆがむ。鼻の奥がつんとして、齒を食いしばった。

なかなか戻らない香奈を心配したのか、龍雪たちが顔を覗かせる。

「香奈、どうしたの？」

驚いたような紗和子の声を聞いたとたん、どっと涙があふれてきた。

しゃがみこむ香奈から弟が便箋を抜き取り、二人に渡す。

「香奈ちゃん、大丈夫だよ。手術すれば治るって」

龍雪が傍らにしゃがんで、背中をさすってくれる。

「私、ひどいこと、しちゃった……」

癌という一文字が、脳裏に焼きついて離れない。

「香奈、お返事書きなっさー。きっとお父さん、待つてるよ」

「お姉ちゃん、書こうよ」

香奈は何度も首を振った。

「何を、書けばいいの。私に、何ができるの」

後から後から、涙があふれる。止めることができない。

「何も、書けないよ……」

龍雪が、強く強く香奈の片手を握った。

「書けるよ」

彼を見上げると、目が合った。まっすぐに、香奈の瞳の奥を見る。

「香奈ちゃんは、お父さんのことが好きでしょ。申し訳ないって、思ってるでしょ」

頷くと、龍雪はにっこりと笑んだ。

「じゃあ、それをそのまま書けばいい」

「でも」

紗和子が香奈の顔を覗き込んだ。

「仲直りしなくて、いいの？」

押し黙る香奈に、龍雪が囁くように言う。

「俺、兄貴が事故に遭う前日に、喧嘩したんだ。絶対に謝らないって意地張ってたなら、事故が起きて……もう二度と、兄貴とは会えなくなった。二度と、仲直りできないんだ。今すぐ後悔してる」

はっとした。龍雪はもう仲直りできない。でも香奈

は、できる。今しないと、後悔が残るかもしれない。

「今からでも、間に合うんよ」

紗和子の言葉を聞き終わらないうちに、香奈の足は自宅へと向かっていった。

お盆の三日目は「お送り<sup>ウーケイ</sup>」と呼ばれている。この日、香奈たちは親戚の家に集まった。みんなで夕食をとるためだ。

女性たちは台所に立ちあくせく準備をしているのに対し、男性たちは居間でテレビを見てくつろいでいる。祖母は「あなた<sup>あなたたち</sup>たちはテレビでも見てなさい。かしまく<sup>じやまくさい</sup>さいあね」と、男性陣を追いやっていった。

携帯からメール受信の音がしたので、香奈はエプロンで手を拭いて鞆を開けた。

（安仁屋くんからだ）

メールには『八時くらいに外を見て』とだけ書かれている。訝しく思いながらも了解の返信をして、溜息をついた。

まだ香奈の右手に、彼の手の感覚が残っているような気がする。

「はいはい！ できましたよー」

伯母の声で我に返った。食卓には重箱が並んでいる。奇数個の重箱に、奇数個の品を詰める決まりがあるらしい。

わらわらと人が集まってきて、みんなで食卓を囲む。泡盛のビンが開けられた。



胃が満たされても、まだ食べ物をお勧められるので、香奈は縁側に避難した。

夜風が涼しい。星空に目を移した。ぼーっとしていると、どこからか太鼓の音が聞こえてきた。人の声も混ざっている。

「エイサーが来よったよ」

叔父が言うと、みんなは外に出て行った。

（そうだ）

はっとして時計を見ると、八時を回っていた。外には出ず、縁側から竹垣越しに外を眺めた。龍雪は、「お送り」には必ず行われるエイサーを見せるためにメールをしてきたのだろうか。

太鼓の音は、徐々に近づいてくる。三線も聞こえる。

「いやーさーさーっ」

元気の掛け声が大きくなる。すかさずの竹垣から、街灯に照らされてエイサーの衣装を着た集団が姿を現した。狭い道が人で埋まる。

（すごい！）

外では、歓声上がる。

太鼓の音が、腹の底に響いた。甲高い声が、三線の音に乗って耳に流れ込む。激しく身体を動かし、太鼓を打ち鳴らしながら集団が通り過ぎる。一定のリズムが、香奈の胸を躍らせた。先刻まで涼しかった縁側が、一瞬にして熱気に包まれた。

（あれ、安仁屋くん？）

紫の布を頭に巻いて黒い衣装を着た龍雪が、三線を弾きながらエイサーの列に混ざっている。彼は長身なので、周囲よりも頭の位置が高い。

香奈は思わず、竹垣に駆け寄った。龍雪は香奈に気付くと、にっと笑う。

刹那、一際大きな掛け声が上がった。

(すごい……)

鳥肌が立つ。全身を包む力強い音と声。圧倒的な力、琉球民族の魂。龍雪が香奈に見せたかったのは、きつとこれだ。

エイサーが通り過ぎても、しばらく気持ちが高揚していた。その場から動きたくなくて縁側に座っていた。

「香奈ちゃん」

竹垣の穴から、龍雪がひょっこり顔を出す。

「安仁屋くん、エイサーはいいの？」

驚いて尋ねると、彼は笑んだ。

「他の人と交代してきた。そっち行ってもいい？」

頷くと、龍雪は竹垣の隙間から忍び込むようにして入ってきた。衣装が汚れてしまわないだろうかと心配する香奈をよそに、彼は縁側に腰を下ろす。

「香奈ちゃん、返事は書いた？」

「うん。もう送った。でもお父さん、怒ってるかなあ。

私のこと、嫌いになったかなあ」

沈黙が訪れる。二人して夜空を眺めた。

「……あのさ」

龍雪にしては珍しく、小さな声だ。

「前に、名前の由来の話したでしょ。やっぱり、言っておこうと思って」

「いいの？」

予想外の言葉に、嬉しくなった。

「沖縄出身のお母さんが、お父さんに何を話したか、思い出せないんだよね？ それ多分、方言のことだと思っんだ」

龍雪はそこで、大きく深呼吸した。

「え、緊張してるの?」

「……してるよ」

彼は、息をつきながら、額に手を当てた。

「うわー、やっぱ、こういうの駄目だ……」

「こういうのって何より。ゆっくりでいいから、教えて」

香奈は不思議に思いながら、足をぶらぶらさせて彼の言葉を待った。

「沖縄の方言でね、かなさん、って言葉があるんだ」

「へえ、私の名前みたいだね。どんな意味?」

龍雪は赤くなった顔をこちらに向けた。じっと、香奈の目を見据える。ずいぶん長いこと、そうしていた。

(なに?)

香奈にまで緊張が伝わってきた。鼓動が速まる。

龍雪は口を開いたが、肝心の声が出てこない。

「龍雪くん?」

香奈が呼ぶと、彼の瞳が揺れた。

「かなさんっていうのは……」

目をそらされた。

「ごめん、ちょっと待って」

声が震えるほど、緊張している。両手で顔を覆うと、龍雪は息を吐いた。

「……愛してる」

「え?」

香奈が身構える前に、龍雪の言葉は終わってしまった。

「愛してるって意味なんだ」

香奈は、笑いがこみ上げてくるのを抑えられなかった。きっと龍雪は、愛とか、そういう言葉が言いづらかったのだ。それであんなに、恥らっていたのだ。

「なに笑ってんだよ」

「えー、ごめん。安仁屋くん、可愛い」

龍雪は、ますます赤くなった。

「だからっ、香奈ちゃんのお父さんは気難しい人っばいから、たぶん子供に、大好き、とか面と向かって言えないんよ！ 名前の中に愛してるって意味を込めれば、呼ぶだけで娘を大切に思えるから……恥ずかしくない、ってことだと思う」

呆然とした。

「そんな、意味が」

あったなんて、知らなかった。方言から取ったとは確かに聞いた気がするが、まさかそんな隠された意味があったとは。

（お父さん、私のこと嫌いじゃなかったんだ）

嬉しくて、顔がほころんだ。

「あのさ、かなさんって呼んでみても、いい？」

静かな声で、龍雪が言った。今までの慌てぶりが嘘のようだ。

「香奈さん？ 何でさん付けにするのー？ いいよ、ちゃんで」

「違うよ、そういう意味じゃ、ない」

龍雪は再び、香奈の目を見据えた。

「……ああ、私のこと好きって思ってくれてるの？

嬉しいなあ、私も好きだよ、安仁屋くんのこと。もちろん紗和ちゃんも」

香奈が言うと、なぜか龍雪は、がっくりと肩を落とした。

香奈は龍雪に顔を上げて欲しくて「流れ星だ」と言ってみる。

「えっ、どこっ？」



彼の顔が一瞬にして上がったので、香奈は嘖き出してしまふ。

「ごめん、嘘」

「なんだよー、嘘かよ」

二人で空を見上げた刹那だった。

小さな銀の光が、細く線を描いて左に落ちて行った。  
あれは本物の……

「流れ星だ！」

香奈と龍雪の声が、ぴったり重なる。

思わず顔を見合わせた。

龍雪に、いつもの笑みが戻った。香奈もつられて笑顔になる。願う事はしそこなったが、流れ星は偉大だと思った。

「沖縄の人は、米軍基地とか環境問題とか戦争の歴史とか、辛い事をたくさん背負って生きてるのに、何でそんなに明るくいられるのかな、って不思議だったの。でも今日、分かった。この島には、辛いことより楽しいことのほうが、ずっと多いね。ここには魂が宿っていて、先祖や子孫を大切にする気持ち、人に優しくする気持ち、歌い踊り、助け合う気持ち、全部、琉球王朝時代から続いているんだね。辛い時こそ協力し合って、前向きになろうとしてる。安仁屋くんは、その気持ちでずっと大切にしてきたから、お兄さんの魂が……ご褒美をくれたのかも」

龍雪は瞠目した。

「香奈ちゃん……ほんとに」

出かかった言葉は、飲み込まれた。

「なに？」

「内緒」

頬を膨らます香奈の元に、油と甘い物の匂いが漂っ

てきた。龍雪も鼻をひくつかせる。

「サータアンダーギーだ」

「え、何語？」

アンダーと言うので英語を想像したら、龍雪に笑われた。

「うちなーの、黒糖とかを使ったお菓子だよ。ドーナツみたいなの」

「へー、おいしそうだけど、お腹いっぱいだな」

「じゃあ、俺が食べてあげるよ」

そう言って、龍雪は不敵に笑む。香奈は、この笑顔が大好きだった。

人が二人いるだけの縁側は、いつのまにか甘い香りで満たされていた。黒砂糖は、沖縄の香りがする。

（そういえば、「魂」は方言で「まぶい」って言うんだっけ）

香奈は空に目を向けた。龍雪の兄は、まだこの島に残っているだろうか、どんな時も笑顔を絶やさない、島人の「まぶい」は。しまんちゅ